

## ライフストーリー研究はおもしろい

### —インタビューの対話性と語りの多元性

桜井 厚（一般社団法人日本ライフストーリー研究所）

#### 1. ライフストーリー研究とは？

##### 1 ライフストーリー研究とは？

ライフストーリー研究のリバイバル：1980年ごろ～

- 以前：個人的記録（日記、手紙、自伝、家計簿……）などの文書資料
- 以後：口述や証言などのオーラル資料

- 中野卓（編）『口述の生活史—  
— 或る女の愛と呪いの日本近代』（1977）
- 中野・桜井（編）『ライフストーリーの社会学』



今日の講演タイトルは、「ライフストーリー研究はおもしろい」としました。おもしろいところをご紹介したいということで、副題に「インタビューの対話性と語りの多元性」としましたが、主にインタビューについてお話をしたいと思っています。小ヶ谷先生がやられている授業というのは、まさにフィールドワークとライフストーリーに関連した授業と伺っておりますので、最初にライフストーリーについて見ておきましょう。

今日のタイトルは「ライフストーリー」を使っています。ですから、「ライフストーリー」と「ライフストーリー」はどう違うの？という点を、まずは押さえておきます。これらは必ずしも区別できるものではありませんが、ライフストーリーと言いながらわたしに言わせればライフストーリーだなどと思われるものもありますし、ライフストーリーと言いながらライフストーリーを説明して

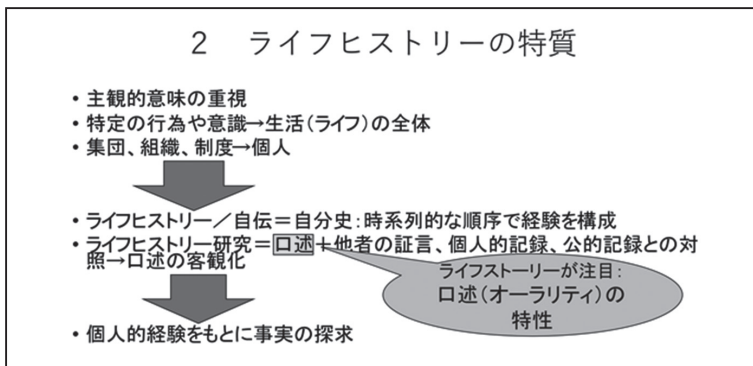
いると思われる場合があります。厳密には区別が難しいところもありますが、わたしは一応区別して考えています。その方がそれぞれの特徴が明確になり方法論としても理解しやすいと思います。

ライフヒストリー研究というのは1世紀以上の非常に長い歴史があるのですが、その研究方法が改めて注目されるようになったのは、1980年前後のことです。それまでは、ライフストーリー研究といいますと、その人たちが書いた文書記録、個人的日記、手紙、自伝など、家や家族にまつわるような記録とか自分が書いた文書資料が使われてきました。ところが、1980年頃には口述とか語りといったオーラル資料がメインの資料になってきたのです。これは画期的とも言える変化でした。日本で、そのきっかけとなったのは、わたしの専門である社会学の領域で中野卓（なかのたかし）さん（1920-2014）というわたしの先生に当たった人がいたのですが、その先生が『口述の生活史』（中野卓編、1977）という本を出されました。これは一言で言えば、ある一人のおばあさんの聞き書きなのです。自分がどんな家に生まれて育てられたか、どのような人生を送ってきたのかという波乱万丈の生活を中野さんがインタビューをして語ってくれたものをまとめて本にしたものです。ここで初めてライフヒストリーに相当する「生活史」という言葉が使われました。ただ日本語の生活史というのは、個人の人生史を意味するライフヒストリーとは少し違い、集合的な村の暮らしの歴史を生活史とも言いますから、かなり幅の広い言葉です。中野さんは、個人がどうやって生きてきたのか、人生を歩んできたかという、まさにライフヒストリーという意味で使ったわけです。この本は、おばあさんの語りを中心にしながら著名な社会学者が編集したことから社会学におけるライフヒストリー研究のはしりになりました。それ以後、質的調査研究のやり方としてこのライフヒストリーというやり方が、いわゆるフィールドワークをしったりしながら調査研究する中で非常に重要な研究方法になってきたのです。

その後、関心を共にする人たちが「生活史研究会」を作りまして、ライフヒストリーの方法を少し理論的な形でまとめて方法論の本として出版したのが、『ライフヒストリーの社会学』（中野卓・桜井厚編 1995）になります。この本は、中野さんが大学を定年で辞められるときに、わたしが中心となって生活史研究会の若い研究者と一緒に作ったものです。この出版が1995年ですが、その頃か

らライフヒストリーが質的調査の方法論として重要なだと多くの方が気づいて関心が非常に高まってきました。ライフヒストリーとライフストーリーはどう違うのかについては、この時期のライフヒストリーがどんな特質を持っていたのかを見ることでわかります。

## 2. ライフヒストリーの特質



では、ライフヒストリーはどのようなものだろうということですが、まず一つは主観的な意味を重視するということです。一人ひとりの人がどのように考えたり、意味づけたりしているかということですね。もちろん、これまでも調査をするときには、意識調査などがあったわけですから、主観的な意味はそれまでも大事にされてきたのですが、ただその場合、主観的な意味といっても、たくさんの人たちがどう考えているかを集合的に、調査する人が分類しやすいような項目に合わせて何パーセントの人があてはまるかという形で調べてきたわけです。ところが、ここでの主観的という意味は、一人ひとりの個人が自分の生活史を背景にしながら、どのような経験をして、どのような経験や価値観をもって聞き手に語ったかという意味での主観であって、それぞれ語り手の個性を伴っているわけです。ですから、集合的に多い・少ないとか、平均、ということではないわけですね。

それから次に、これまではある行為、例えば「選挙で投票に行きましたか？」

と特定の行為を聞いているわけです。「どこの政党を支持しますか？」というのは、その意識を調べるわけです。そうではなく、その人のライフ全体、生活史全体を押さえて、例えばある特定の行為もその人のライフを通して理解できるという考え方が、ライフヒストリーの重要なポイントになります。さらに、すでにふれましたが、これまでは社会的なものに焦点を合わせると集団とか組織とか制度になるのですが、一人ひとりの個人から理解するようにしましょうというわけです。集団とか組織とか制度とかというのは、行為や役割とかが構成要素なので、例えば、この人は先生だからその職業意識は何か、というような形で、その役割にスポットをあてますけれども、その先生は家庭に戻れば、お母さんだったりお父さんだったり、近所ではおじさんとおばさんであったりするわけです。日々の生活の中でたくさんの役割の複合体として生きてるわけです。またどういう環境で成長してきたかも生活に影響します。そういう意味で、個人をトータルにとらえていきましょうというのが、ライフヒストリーの基本的なとらえ方になります。

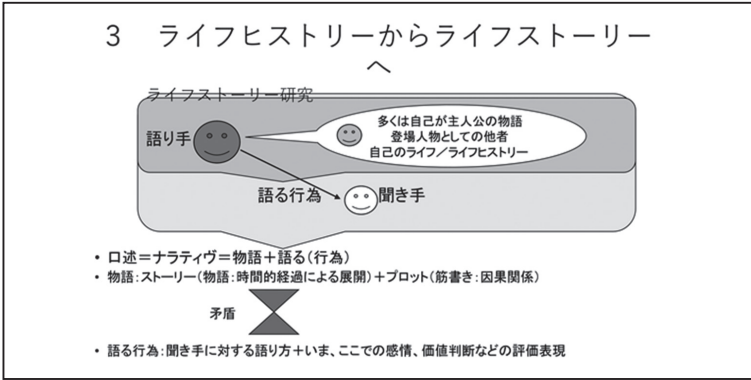
ライフヒストリーは、そうした特質をもっているわけですが、よく考えてみると、たとえばそれまでの自伝と類似のように見えます。1970年代から自伝ではなく「自分史」という言葉が流行りますが、これは歴史家の色川大吉さんという、実は先日、亡くなられましたが、その方が提唱した言葉でもあります。自分史は一人ひとりの普通の人たちの生きてきた道筋ということで、それまでの著名人の自伝とは異なります。自分史は自分が書いたり話したりするのですが、調査者が他者の自分史を作ることがライフヒストリーということになります。わたしたちが自伝を書くとき、「生まれた時にはどうでしたか。どこで生まれましたか。どういうふう to 育ってきましたか。どんな教育受けましたか。学校を出てどんな仕事に就きましたか。」という、ある種の時間的な流れを踏まえて、その人のライフヒストリーをおさえるのが基本です。だから、「あなたのライフヒストリーを語ってください」といったら、そういう語り方、つまり時系列的な順序でどうやって生きてきたかをまとめるのが、ライフヒストリーの基本です。ライフヒストリー研究というのは、そういうライフヒストリーを構成しながら、それをもとに個人を理解する考え方なんです。

そのライフヒストリーを構成するにあたって何が大事かということ、一つはそ

の人が自分はこうやって生きてきましたという、自分の語りです。それからそれだけでは極めて主観すぎて心もとないので、他の人が例えば、「家族、親はどう言ってるんだろうか」とか、「近所の人はどう言ってるんだろうか」という発言もあるでしょう。また、その人が昔残した日記のような記録もあるでしょうし、学校だったら成績表もありますね。そういうものと対照しながら、口述だけでは主観的で心もとないのでそれをちゃんと客観化しようとしています。ある個人の伝記を作っていく作業ですね。こういうライフヒストリーを作りながら研究をすすめていくことで、一人ひとりの個人的な経験をもとにある出来事や歴史的イベントがどんな出来事だったのかという事実を確定しながら、それに対する個人の主観的な意味をもとりあげていく作業になるわけです。例えば、戦争について、今では経験者は高齢で少なくなりましたが、戦争経験を聞いていきましようという形で聞くときには、何人かの人に当時の記憶を語ってもらい、それを様々な資料と付き合わせ、「この人はこんなふう言ってるけれど、本当はこういうことだったんだ」というように出来事の実事を確定しながら、その個人が歩んだ道筋と対照するやり方をするわけです。ですから職業などについても、この職業というのは、こういう生活環境があって家族の期待や自分の意思との間で職業選択をしたのだな、ということを発見したりしていきます。震災経験を語ってもらうという場合でも、何人かの人に話を聞いて、あの時はどうだったんだろうというのを確定する作業をしながら個人のライフを考えます。これがライフヒストリーの研究の基本的な考え方です。

では、ライフストーリーとは何かというと、シンプルには自分のライフやライフヒストリーを口述することに焦点をあてた研究法ということです。つまり、口述の語りをもう少し重視してみましようというのが「ライフストーリー」なのです。ライフストーリーは、ライフヒストリーを基礎にしている、あるいは少なくともそれを前提にして、実は口述の特質というものをしっかり押さえるスタンスをとることになります。だから、言語的なコミュニケーションのあり方というのが非常に重要な要素になってきます。

### 3. ライフヒストリーからライフストーリーへ



では、次にライフヒストリーからライフストーリーへ、研究法がどんなふうに進んでいったかという話になります。ここに語り手がいるとしますと、この語り手は、ある話をしますね。それは例えば、「自分はこんなふう生きてきたんだよ」ということを語るわけです。その語られた物語の多くは、主人公になるのはだいたい語り手自身です。もちろん、自分のお父さんの話をずっとする人もいるかもしれないということを考えると、主人公はお父さんになる場合もあります。多くは自分を語ります。そこにいろいろな物語が展開していく形になります。その人のライフだったり、ライフヒストリーを語ったりするわけですが、1つの物語になっています。語るということに着目することが、狭い意味でのライフストーリーの意味です。語り手は自分のライフヒストリーを語っていきますから、これは非常に狭い意味でのライフヒストリー研究でもあるわけです。ライフストーリー研究というのは、語り手がどんなふうにしたかという語りの行為にも焦点をあてて考えましょうという研究法ですね。

ところが少し厄介なことが起きます。語り手が「誰に」話したのかということは、とても大事なポイントになってきます。ある人がある大学の先生に話をするのとその学生に話すのでは、本当に同じことを話すだろうか。語る相手が変わると、語りの内容も変化したりして、それほど単純じゃありませんよね。すなわち、語り手は自分のライフヒストリーを「誰か」に語っていますので、そこには語る行為が関係しています。この語りの内容と語る行為としての語り

方を込めた概念をナラティブといいます。ライフストーリーというのは、この語る行為が非常に重要なポイントになってきます。語ることを通して物語が展開していきます。物語というのは、この時こうしました、それからこうしましたという時系列的な出来事の展開が基本ですが、さらにプロット（筋）が入ってきて、「今日は風邪を引いたから学校を休んだ」というような形で理由や原因が示されたりするようになって通常の物語となります。「今日は学校を休みました。だから家に居ました」という時間的経過の語りは基本的ですが、「風邪をひいて学校に行けなかったけど、これ幸いと家でゲームを満喫した」となると、「なぜかあまり学校が好きでないようだ」という興味深い一つのプロットが展開するわけです。それで物語ができあがるわけです。まず、これがライフストーリーの中身になります。

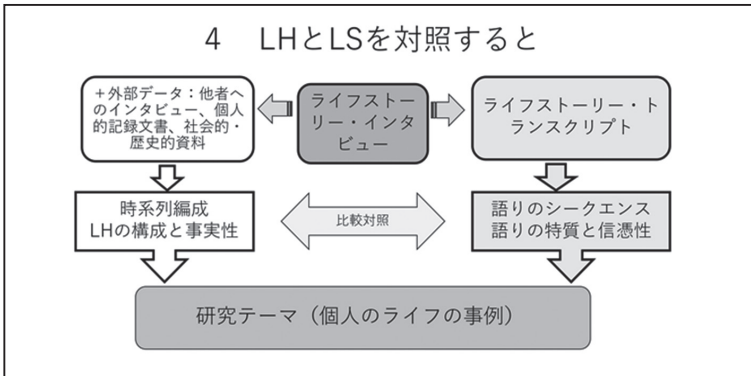
ところで、この語りには聞き手がいるわけです。聞き手が何者かによって物語の展開が変わってくるのではないか、ということがここでのポイントになります。先の物語を例に引けば、学校の先生に「ゲームを満喫した」とは言えないわけです。ライフストーリー研究というのは、「風邪で学校を休んだ」という狭い意味の事実で終わってしまいますが、ライフストーリー研究というのは、この語る行為を含めて考えますよという研究のスタイルなんだ、ととらえてくれればよいのです。

そうすると、すでに述べたように、誰に対してしゃべるのかによって違ったり、この物語自体は「わたしは昔、こういう学校を出てからこういう仕事につきました。それから実はこういうふうに移職して今の仕事になったんですよ」というストーリーのことなのですが、それが今になるとよかったのか悪かったのか、「だから今があって、わたし、安泰なんです」と言うのか、「あれが失敗だったんだよ」と言うのか、いろいろですね。そういう価値判断や苦勞ばかりしてきたなっていうふうには評価している表現が、聞き手に対して語っている行為との絡みで出てきます。簡単に言いますと、物語（ストーリー+プロット）はすでに終わってしまった過去の出来事の展開なのですが、語る行為を考えますと現在も視野に入ってきます。現在を考慮すると、聞き手が変われば語り手が語る物語も変わってくる可能性があるわけですし、また、とても辛い話、戦争経験や災害にあったときの大変辛い話をしている人が、時間が経って今、語る



時には、それを笑いながら、「あの時があったからこそ今はこんなふうに仕事ができているんだよ」というふうに、そうした困難を克服して笑いながら語ることもありえるわけです。本来は辛い悲しい物語が、聞き手に対しては笑いながらしゃべれるという状況もおきてしまうわけです。そういう一種の矛盾した構図も語りの場では生まれてきます。結局、それは時間のあり様が違うのです。物語の基盤となるあり様と、聞き手に語る語り方というもののあり様、端的に言えば過去性と現在性というものの違いが、ここにはあることになります。

#### 4. LHとLSを対照すると



そうすると、ライフヒストリーとライフストーリーをちょっと対照してみるとどんな感じになるでしょうか。この図のLHというのは、Life History、LSというのはLife Storyを略して書いています。例えばライフストーリー・インタビューをします。語ってくれるのは基本的にライフストーリーです。ライフヒストリーというのは、「あなたが生まれてから今に至るまでの話をしてください」というふうに質問したら、語り手はできるだけライフヒストリーを語ろうとするでしょう。けれども、わたしたちはもうちょっと柔軟にインタビュー始めますから、そういう意味では、ここでのインタビューはライフストーリーを語ってもらうぐらいに捉えておいた方がいいと思うんですが、ライフヒストリーの方は、結局は先ほどから言っているように、このインタビュー・データをふまえながら



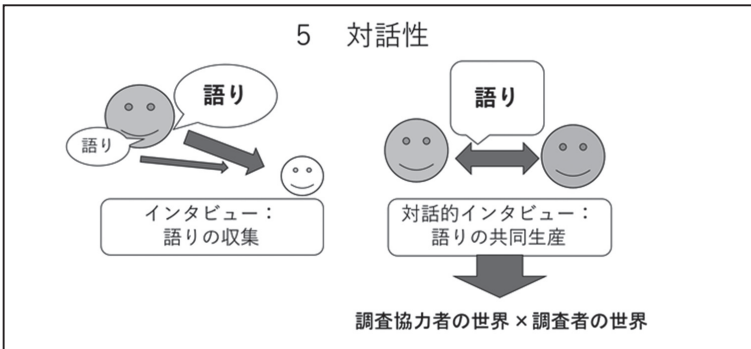
他のデータ（外部データ）と突き合わせていくという作業をする中で確定をしていく、つまりライフヒストリーを構成していくわけです。それに対して、ライフストーリー研究というのは、まずそのインタビューの流れをしっかりとおさえましょうというので、トランスクリプトを作成します。トランスクリプトというのは文字起こしをしたデータのことです。語ってくれたことをそのまま一つのデータに構成して客観化するという考え方です。ライフヒストリーになりますと、それをもう少し他の外部データと突き合わせながら可能な限り事実を確定しましょうということになります。簡単な区別をすると、ここからライフヒストリーの方は、先ほど言ったような時系列的な変遷をたどりながら、この人はこういうふう生きてきたんだ、こういう現実に直面したんだということを確定していく作業をします。それに対してライフストーリーのトランスクリプトは、時系列的な変遷ではなくて、語りの流れをしっかりとおさえましょうという考え方から始まります。

人は「あなたの人生、ライフヒストリーを語ってください」って言っても、子どもの話からしても、すぐに現在の話に移ったり、「いやうちの子どもたちがね」と自分の子どもの話になっちゃうことになりかねない。自分の子ども時代をしゃべりながら、今の子どもや自分の子どもの話をするということが起きるわけで、時間の移動がどんどん起きるわけです。それがどんなふう変わってきたのかということ、ライフストーリー研究は大事にします。ライフヒストリー研究の場合だったら、この人はどういうふう子ども時代を過ごし、それからどういうふう学校に上がりというふうきっちり整理をしてとらえますから、途中の自分の子どもの話は今のライフの話に持ってきてみましょうと語りの構成を変えちゃうわけです。だから語りの順序というのは、(スライド画面を指しながら) LH(時系列編成、LHの構成と事実性)になりますとしゃべった通りではなく組み替えるわけです。LS(LSの語りのシーケンス、語りの特質と信憑性)は、インタビューのやり取りが非常に重要になってきますので、インタビュー・トランスクリプトを作成して文字データを作ったときでも、インタビュアーがどういうインタビューをしたのかをしっかりと記録していくことがポイントになります。ライフヒストリーは必ずしもそれが意識されていないのです。むしろその人がどう生きていたかという事実性が大事なんだ、という捉え

方をします。もちろん、実はライフストーリー研究をするときでも、「語りのシーケンス、語りの特質と信憑性」などをふまえているものの、ライフヒストリーを念頭に置いてやっているというのが正直なところ。ライフヒストリー研究をやっている人は、必ずしも「語りのシーケンス、語りの特質と信憑性」を意識しない傾向は若干ありますけどね。ライフストーリー研究をやるときには、ライフヒストリーもちゃんとふまえながらやるのが基本だよという考え方をとっています。そのうえで、調査者の明らかにしたい研究テーマにアプローチしていきますよ、ということになります。

今日はまさにこのライフストーリー・インタビュー、この辺（ライフストーリー・トランスクリプト、語りのシーケンス、語りの特質と信憑性）を考えるとなかなかおもしろいと言いたいし、それが本筋になります。こういうライフストーリー・トランスクリプトを作って、その文字資料をもとに「語りのシーケンス、語りの特質と信憑性」を大事に考えていますよ。そこで具体的に何が重要なのか、どこに焦点を合わせればよいのかを見ていくことになります。

## 5. 対話性



そこで非常に大事なものは、やっぱりインタビューというのは決して情報を相手からもらって、あるいは情報を引き出してくるということではないということです。一般的にインタビューでは、相手の方にある経験についてお話をして


もらいます。これが「語り」ですが、そういう語りをいろいろな人してもらって、それらをわたしたちは収集して、それらをもとに分析したりするわけですね。インタビューというのはこういう語りの収集なんだという素朴な捉え方は今でも一般的だと思います。そしてこれらの語りを分析しましょうという考え方が研究の大きな流れのひとつにあります。

ところが、ライフストーリー・インタビューというなかで、とくに対話的なところを重視しましょうというスタンスをとった研究法——これがわたしのライフストーリー研究の立場なのですが、ライフストーリーというのは、語り手の語りだけで成立するわけではなく、聞き手との関係の中で構成されるというふうにとらえますので、その際は語り手（インタビューイ）とインタビュアー（例えばわたしたち）が対話的なやり取りをしていく中で、その人のライフというものが語られていくのだという捉え方をします。「いやいや、この語り手の人のライフなんだからやり取りをする中でとらえるというのはどうなの」と思うかもしれませんが、すでに述べてきたように、インタビュアーがどんなふうに関心によってインタビューイの答え方が変わってくるということを思い浮かべると、「こうやって聞いているから、この語りが出てきたよね」ということになるはず。そう考えますと、語りというのは一種の共同的な2人の作業を通して生まれるものなんだということが、わりと素直に納得できると思います。

そうなりますと、調査協力者とは語り手のことですが、調査する側というのはわたしたち聞き手の方ですが、この二つの世界がここでやり取りをする形で語り手の世界が見えてくるという捉え方です。対話的なインタビューというのは、こうしたやり取り（相互行為）を非常に重視しながら、語りの世界を分析していきましょうという考え方です。その時にはある意味では、調査協力者の世界も見えるけれども、調査する自分の世界も見えてしまう部分もあるんだということになります。わたしたちは陰のようにいる、あるいは見えないところから見ている小説家や神のような立場ではなくて、わたしたちもこうしたライフストーリー研究の一つの題材でもあるのだというところをまず自覚しましょう、ということがこの考え方の基本になります。


## 6. 対話性の面白さ① 語り手も調査者を見ている！！

**6 対話性のおもしろさ①**  
**語り手も、調査者を見ている!**

 何者か、どのような人物か:社会的カテゴリー化  
~~対照~~  
語り手の自己の位置づけ: 自己カテゴリー化

Cf. 戦争体験の語り: 教員と学生に対する語り方の違い

何を聞きたいのか  
→どのように語るか(土産話/本物の土産)

語り手は単なる情報の提供者ではない→語りの操り手 

そこでこの対話というスタンスから見えてくるものの面白さを少しご紹介したいと思います。ここで言いたいのは、わたしたちは調査をする側で、通常調査する相手の人を客体、対象として見えています。調査対象などといいますね。でも、その対象はですね、実は、いろいろなことをやる人たち、わたしたちと同じようなことをする人たちなのです。単に、情報を持っているからうまくやれば話してくれるという単純な世界ではなくて、向こうも「こんなやつには適当に応えておけばいい」とか「この人だったらしゃべってもいいかな」といろいろ考えるわけです。言ってみれば、調査者が客体として語り手を見るのに対し、語り手も調査者をそうやって見ているのです。彼らも見の主体なのです。そこをしっかりと踏まえる必要があります。いろんな例が挙げられますけれども、例えば大学の教員がインタビューに行こうとしたら「大学の先生なんて、わたし堅苦しい話なんて何もできないからいいです」とか言われて、実はわたしも断られたことがあります。アポイントをとるために電話で自己紹介したらそうなっちゃったので、直接会いに行って話しかけながらインタビューのお願いをすると、どんどんしゃべってくれたりするということがありました。当時は若かったので、「お兄さん」とか言われて(笑)、「このお兄さんならしゃべっていいか」みたいな感じでね。そういうふうには、「大学教員」というようなカテゴリー化をされると、「堅苦しくてしゃべりにくい」ということもあるわけですが、「お兄さん」なら気楽に話せるというわけです。とにかく語り手というのは、調査者をどんな

人物かと見ていて、ある種の社会的なカテゴリーにあてはめて、何を話そうかと思っているわけですね。

語り手は、調査者を一定の社会的カテゴリーで見ながら、それに合わせて自分を位置づけて語ります。例えば、特に若い学生がインタビューをしていくと、語り手がだんだん若い人に対して励ますようなことを言ったり、あるいは教諭するようなことになったりすることがあります。東日本大震災の被災地でのフィールドワークで、震災経験の話を学生がインタビューしたときでも、女子学生に対して、インタビューの年配女性が「とにかくあなたは大学を出てやってるんだから、こういうふうやってかなきゃダメだよ」というふうに、そのおばちゃんは一生涯懸命その学生に女性としての生き方を教えるわけです。被災者を励ます立場の学生が励まされてしまうわけですね。結局「何を聞きに行ったの」という話になる。向こうからいろんなことを教えられた、ということばかりが出てきて、その人がどういう経験をしたのかは二の次になっちゃった、という話もあるくらいなんです。そういうふうに、語り手は若い学生に対しては、単なる被災者ではなく、女性として、人生の先輩として自分を位置づけて語っているわけです。自分たちの世代は「なかなかできなかったけれど」ということが背景にあるのです。そういうふうに、語り手は調査者を最初は調査に来た人って思っている、インタビューが進む過程でだんだん見方が変わってくるわけです。調査者から若い女子学生というようにインタビューに行った女子学生の社会的カテゴリーが変わってくるわけです。それに対応して語り手も調査協力者から先輩の女性というふうに自己のカテゴリーが変化しているわけです。

すでに申し上げましたが、語り手というのは聞き手が違うことで、語り方に違いが出てきます。具体例を挙げますと、わたしがいる兵隊経験者の男性の方に話を聞きに行ったときに語ってくれたことと、その後同じ人に対して今度は学生が聞きに行ったのでは違った話が出ました。学生に対しては、兵隊の訓練というのは決して悪い経験だけではなかったんだというのをかなり強調して、今の若い子はもう少し鍛えないとみたいなことを結構強調したわけです。一種の軍国主義的なスタンスでの激励という語りですが、わたしの前ではそうした語りは一切やらないで、戦争って大変辛かったですという話をずっとされまし

た。そんなふう聞き手の社会的カテゴリーに応じて、語りが変わっていくことが起こり得ます。

また語り手は、聞き手が何を聞きたいのかがわかると、それに対してどのように語るのか、何を持たせて帰ってもらおうかを考えます。これは、さきほど自分史の話で色川大吉さんの話を出しましたが、彼はお土産には2種類あるといっています。水俣で水俣病の調査を長期にわたってしていましたが、遠くから偉い大学の先生がやってきたから「じゃあなんか話してあげないと」という思いで話してくれる話。これは相手が喜びそうな話ですね。水俣病の被害を聞きたいんだな、じゃ、被害の話をしましょ、ということ。それから何度も通ってきている調査者に「あなたいつも来てるね」というところで話してくれる話。違うんですね。いつも通ってくる人には、「持って帰れば」といって土産に持たしてくれるものはなかなか他人に語れない話もさることながら、野菜や魚も一緒に持たしてくれたりするわけですね。わたしなんかも田舎の方の調査地に何度か行って顔見知りになると、いろいろなものをもらってくるってことがよくありました。

何を言いたいかという、最初は聞き手が喜びそうな話、例えば、わたしはマイノリティ問題をやっていたことがありますので、被差別者の人から話を聞こうとするわけですね。ライフストーリー調査ですから差別を受けた話だけでなく生活、ライフに関わる経験を聞こうとしているのですが、語り手は自分たちに「どんな酷い差別を受けたかを聞きたいんだ」と思って、その話を最初にしてくれます。本当は人生それだけではないわけですが、1回目はだいたいそんな話で終わる。なかには「わたしは、そんなしゃべることありません。差別を受けたことありませんから」という人もいますよ。だから、1回だけのインタビューで期待通りの内容が聞けたと思っていると大きな勘違いになります。わたしたちが聞きたいのは、被差別の経験だけでなく、「あなたがここでどんなふう生きてきたかを聞きたいんです」ということまで納得してもらうには、ちょっと時間がかかります。そんなふう、いわば最初の土産話、「この人、差別の話聞きたいんだ。差別の話、はい、こんなに大変でしたよ」と話をしてくれますが、その背後にはいろんなことがあるのです。一人ひとりのライフを理解するためには、その背後のことをしっかり押さえていかないと

いけないのです。何度か通ううちに「これもってけ、あれもってけ」というような形になります。現地で1週間ほどのフィールドワークをしていると、現地の人とも親しくなって、昔は、若い学生さんに対して結婚話が持ち上がったりました。中野卓さんの指導で、当時、わたしはまだ大学院生だったんですが、岡山の水島工業地帯の調査に行ったときでも、学生がずいぶん気に入られてね。男の子でしたが、家に絶対来てほしいという（笑）、そういう話は当時よくありました。最近はそういう話はあまり聞かないですね。

いずれにしても、語り手というのは単なる情報の提供者じゃなく、ちゃんと自分の状況をふまえ、この人には話してもいいよねと見極めながらしゃべっているのです。単純に語り手が表面的なことを言うとか嘘を言うといった話ではなくて、語り手がまさしく語る主体なんだというところを押さえることが必要だということです。なんらかの被害を聞く姿勢で行ったら被害の話を用意してくれている。それで終わって「しめしめ思った通り、大変な被害を受けたんだな」とそそくさと帰っていく研究者というのはちょっとまずいわけですね。現に生活している人は、やってくる調査者を見極め、その人に合わせて対応するくらいのことはちゃんとやるんだ、ということは把握しておいた方がいいのではないかと思います。人は自分のことをどんな人に伝えればいいのかということとちゃんと見極めてますよ、と言いたいのです。

## 7. 対話性の面白さ② 語りを促すインタビューの手法

語りを促すインタビューの手法というのはいろんな形がありますが、非常に簡単に整理しますと三つになります。インタビューを経験すればだんだんわかっていくわけですが、一つ目は、一番古典的な型ですが傾聴インタビューです。「あなたがどんなふうに生きてきたかを知りたいんです」ということで、「子ども時代からの経験を語っていただけますか」というふうをお願いして「いいよ」ということであれば、語りが始まります。「その後どうなさいましたか」と語りを促していくわけですね。わたしは複数回のインタビューを原則にしてるわけで、一回目、ちゃんと聞いてですね、そしてその上で、今度は話してく



れた中で、非常に重要なトピックを語ってくれたなら「そこをもう少し細かく聞きましょう」という形で2回目のインタビューをします。順序としてそんな感じでしょうか。さらにちょっと抜け落ちていることや自分のテーマとの関連で聞いておきたいことをしっかり3回目に聞く。複数回のインタビューが大事なのは、とにかく一回目行ったときは、「この人何者だろう」というふうに語り手は見ているわけですが、2回目行ったらね、確実に今までの関係が変わりますね。2回目行くとすぐそれがわかります。旧知のような感じになったりすることもあり得ます。そういう意味で、ぜひ複数回のインタビューを心がけていただきたいのですが、例えば、傾聴を心掛けるのであれば、こうした順序が必要になってきます。

しかし、インタビューは必ずしも傾聴だけではありません。アクティブなインタビューというのもあります。例えば、聞き手の方が、「わたしもこんな経験をしました」という話をすると、それに語り手が共感するところがあって、話がどんどん展開していくということが当然あります。そういう自分なりの経験もふまえて語りを促します。「こういうふうなこともあるかと思いますが、どうでしたか」という形で事例や自分なりの考えを披露して語り手の思いや考えを語ってもらう。傾聴だけではなく「いやいや、こういう見方もあるんじゃないですか」と、ちょっと異論を差し挟んだりすることによって、新しい話が展開することがあります。これらはあくまでも対話ができるようになったときですね。それから語りを展開するポイントになるのは、その人がどんなふうに自分の人生の中の大きな変化を経験したのか、病気をしたりとか災害に出会ったりしたトピックが出てきたときです。こちらもキリスト教系の大学ですけども、たとえば新たに宗教に入信する場合は人生の大きな転機になるわけですね。そうトピックに着目して、新たな問いかけをしていくかたちで話を展開していくということもあるだろうと思いますね。そういう意味でアクティブ・インタビューというのは、インタビュアーがある意味で積極的に自分を出しながら相手と会話をしていくものです。対話的インタビューというのは、もちろん傾聴は基本ですけども、アクティブ・インタビューに非常に近い形のインタビューということになります。

もう一つ押さえておきたいのは、こういう例がありました。ある学生さんが、





女子学生ですけど、独居老人のライフストーリーを聞きたいということで、一人住まいのあるおばあさんの家を訪ねていったんですね。ところが、いろいろ話をして受け入れてくれるんだけど、ちっとも自分の過去の経験をしゃべってくれない。「うーん」とか言って。断片的な話はするけれども、それ以上はそんなに話してくれないので、「どうしたらいいんでしょう」と相談にきました。「あきらめますか」ってわたしが聞いても、「いやいやあきらめたくない、せっかくそういう近くにいた独居の女性は少ないので、ぜひ聞きたい」という。じゃあお宅に行って、夕ご飯のお手伝いなどをしながら一緒にやったらどうですか、と提案したら、実際に夕ご飯のときに何度も通いました。断片的な話しか聞けないけれど、生活に関与しながら、それを記録、フィールノートにずっととっていました。だから断片的な話しか聞けなかったんですけど、ただその人がどんなふうにいるのかを含めて、そこから少し過去の話が出てきたりして、その記録自体はとてもおもしろいものになりました。ライフヒストリーを全部聞くという形ではないけれども、一種の生活観や考え方、価値観、「昔はこういうことあったんだよ」とずっと出てくる話を記録する形でインタビューをしたわけです。そのレポートはとてもおもしろいレポートになったことがあります。わたしが、昔、ライフヒストリーの課題を、学生さんにやってもらおうということで、そういう授業を持った時の一つの例なんですけども。生活の場を共有するのは、一種のエスノグラフィーですね。自分が参与していて、自分自身のことも含めて、そのおばあさんとのやり取りをずっと記録をしていくという形をとって彼女のライフヒストリーなりライフなりを描いたわけです。こういうのも、ある意味、その人の人生やライフを理解するとても重要なものになるんじゃないかと思います。

## 8. 対話性の面白さ③調査協力者（語り手）への影響

対話性のおもしろさの3番目は、インタビューが語り手に与えるある種の影響、効果です。語り手は自分のさまざまな経験を話すわけですが、それを聞き手である調査者が、「たいへんご苦労なさったんですね」と相槌を打ちな

## 8 対話性のおもしろさ③

### 調査協力者（語り手）への影響

- 自己のさまざまな経験についての調査者（他者）による承認
- \*ご苦労なさいたんですね。 \*素晴らしい経験をなさいたんですね。  
\*そのときの気持ちは分かる気がします。
- これまでだれにも語らなかったことを語る経験（トラウマ体験）
- 自分が何者かである 
- 
- 自分が何者かになる   
- 終えて感謝の言葉が漏れることがある

カタルシス：治療  
エンパワーメント：声と自分のストーリーの獲得

がら、その経験を認めたり受け入れたりする作業をするわけですね。そういうことをしていくことによってですね、「受け止めてくれた」となると、さらに話が展開するということもあります。それからインタビュアーが真正面から向き合ってくれたとなると、実はこんな話は今まで他の人にはしてないわ、という話になることもあります。その人にとってトラウマになっているようなことがあり得るわけです。それからライフストーリーは語り手が自分を語ることで、通常は「自分が何者であるのか」を語るわけです。これは一種の自己のアイデンティティを語ることになるわけです。ところがもう一つ注意してほしいことは、インタビューで語ることで初めて自分を語る、という人が結構いるわけですね。これまで断片的には話してきたにしても、自分が幼いころからこんなふうで育って、こんなふうで生きてきたんだということを一貫して、初めてここで、あなたにしゃべったという経験になるわけです。その時に、語り手は、インタビューの最初は自分が何者であるかはまだ見えていないんだけど、しゃべる中で見えてくるということがありえるんですね。こうしたライフストーリー・インタビューをわたしは「自分が何者かになる」過程というふうに理解してるわけですね。“being”ではなく“becoming”という形なんです。言ってみれば、ふつう、まとまって自分のことを話す機会はありませんから、自分が何者かとは誰も問われることはないわけです。けれど、それを話すことによって、自分という存在が「こういう自分だったんだ」と見えてくることもあるわけですね。そういう意味で、その人が何者かに「なってい

く」という語りがあるんだということを理解してほしい。ある被曝者の経験の語りを聞いた人が語り手が一種の被爆者に「なっていく」、語ることによって「被爆者になっていく」ことを指摘しています。そういう意味で、インタビューを通して、これまで「そんなこと、考えなかったけどな」と言いながら、「でも、当時こうだったんじゃないですか」と言って対話的に物語を構成していく中で、何者かになっていくわけですね。そういう理解の仕方をふまえて考えてみるのは一つの大事な見方になります。

それからインタビューは、「ありがとうございました」と、終えた後にこちらが御礼を言うのは当然なのですが、語り手の方から、こんな話ができてよかったと喜んでくれる場合がたまにあります。これを常時、期待してはいけませんけれども、こういう言葉が漏れることはあるんですね。学生がインタビューに行ったりすると、自分の一生をずっと語ってくれた人のなかに自分の伝記を作りたいと言う人が、今まで何人かいました。商売をやった女将さんとか、旅館とかやってきた人たちのなかにはそういう人がいました。そんなこともありますね。いずれにしても、これは自分のことを秩序だった形で話すことで、自己発見につながったり、対話によって自己を肯定的にとらえるようになったということですね。これは一種のカタルシス的な側面、治療的な側面、元気が出たというエンパワーの側面、そういうことを物語っています。

もともとライフストーリーを含めて、オーラルのことを大事にしようというスタンスは、フェミニズムからスタートしている部分が結構多いんですね。それまでは文字の歴史が主で文字は男が支配してきましたし男が権力をもって歴史を支配してきたわけですが、女性たちが声をあげ、語ることによってパワーを身に付けていききっかけになったのがフェミニズムです。オーラルヒストリーが重視されるようになったのは、20世紀の後半でこの時期のフェミニズムの勃興と重なります。言うなれば、声を持っていなかった人たちが自分の声を獲得していく過程と類似の瞬間が、この対話性、すなわちインタビューの過程にあるんですね。そこはやはり大事にしたいですね。

## 9. 対話性のおもしろさ④ 調査者（聞き手）への影響

それから聞き手の方にも影響があるんです。つまり私たちも学ぶことが多いんだよということですね。こういうインタビューをする授業の趣旨で言うことがありますが、他者の人生を通して自己理解が促されていくんだよ、ということですね。私たちがこうだと思こんでいる思い込みを、実際その当事者の人と出会って話を聞いてみると「思っていたのちょっと違ってたよね」ということが結構あります。昔、ライフストーリーの論文をまとめた本を出したこともありますが、特に初期の頃、ライフストーリーの研究を初めて論文にまとめた人たちの最初の論文の入り口は何かというと、「自分はこういう人たちはこうだと思っていた。ところが話を聞いていたら違った。自分が思い込みを持ってたんだ」という反省から始まる論文が結構ありました。それに気づいたこと自体は非常にいいことだと思いますが、わたしたちは物事に対して色眼鏡もっているわけですので、それをなくしましょうというのは、言うは易くても行うのは難しいわけですね。むしろ自分の色眼鏡が何であるのかを反省的に気づいていくことから見えてくるものがありえるのです。

また、ノンバーバルな部分にもしっかり注意をすることが重要です。例えば、インタビューをしたあとの文字起こしのトランスクリプトも、感情とか動作、つまりノンバーバルな部分をちゃんと記録をしていきます。これは語りの意味を理解し、解釈する際に有効です。もう一つ非常に重要だと思うのは、「沈黙」というものをしっかり意味があるんだということですね。相手がだまっちゃうとわたしたちは心配になっちゃいますから、つい次の言葉を継いでいって話をつづけようと、あせって新しいトピックに転換することが時々ありますが、必ずしも語り手は語りを止めているわけではない。沈黙にはある程度ちゃんとした意味があるんだということは押さえておいた方がいいことですね。言葉を選ぶときとか、言葉にならない感情を表現している部分の沈黙、それから古い昔の話を思い出していて、「ああ、あの頃は大変だったよね」というときには沈黙があります。一瞬の沈黙というのはすごく重要な理解のポイントでして、昔の話をしているときには、物語の時間から今に戻ってくるのにちょっと時間が必要なんですね。ここに沈黙が入ってくるということもあります。こうした

沈黙の意味は、語りだけに注目したのでは気づかないわけで、対話を重視することで気づくものです。そういう意味で、わたしたち自身がいろいろなことに気づいていくことが、他にもたくさんあると思いますけど、対話的インタビューのおもしろさだと思います。

## 10. 多元的語りのおもしろさ① リアリティの複数性

今度は、インタビューの対話のおもしろさではなくて、ライフストーリーの話を聞くおもしろさについてお話しします。最初に、中野さんの『口述の生活史』がライフストーリー研究の先鞭をつけたと申し上げましたが、この中野さんの本ではオバアサンの語りがいろいろ出てくるんです。その中にお稲荷さんのきつねが10円札をくれた話なのです。子どもの頃に、隣りで庄八という人がお稲荷さんにお祈りをしていて、「窓の外に手を出しとれ」というから出してみたら10円札が降ってきたんですね。ちゃんとつかんだ、と。そしてその話がどうなるかということ、これ関西の方なんです、伏見稲荷神社の10円札がそこに来たんだという話になったんですよ。それ信じてるわけですよ。伏見稲荷は大丸がいつも10円札を、明治時代の話ですよ、いつもそこに寄付をする。そのあるはずの賽銭の10円札はその年はそこになかった、という話までついているんです。ちゃんと因果関係がついてるんですよ。結局、その人はそこからお稲荷さん信仰に入っていくわけですね。例えば一日である人を故郷へ呼び戻すこともお稲荷さんに祈ってやっているわけです。そういう経験を語っています。そういう話がちりばめられてるんですね。これは何だろうという世界ですよ。いわば、現実と幻想の世界といった、いろんなリアリティが語りのなかに出てくるわけです。

海外の例で有名なのは、クラパンザーノという人類学者の研究で『精霊と結婚した男』（1991年）、モロッコの男性の話です。その人にずっとインタビューをしたり一緒に行動をしたりするんですが、結局、この男性は精霊の女の人と結婚しているんです。そこで色っぽい話をたくさんしてくる。西欧人のクラパンザーノは悩んじゃって、どうそれを理解すればいいか、と。昔の研究者だったら、客観的現実の話じゃないから捨てちゃうんですが、クラパンザーノは捨てられないんです。その人の生きてきた人生に関わっている。そこで一応分

けて考えます。ライフヒストリーにあたる部分は、この人が生きてきた部分ですが、ある程度客観的なデータとして押さえることができます。その部分と、その人自身が「真実だと思っている世界」があるんだという、二つの次元に分けるわけです。この両方をとらえて、この男の人生を描くわけです。昔だったら人類学者は必ずしも評価しなかつただろうと思うんですが、もうその人自身の真実なんだということを認めましょうということで、クラパンザーノの研究は衝撃的でした。これに対して『口述の生活史』の方の解釈はどうかという話はちょっとあるんですが、これは別の機会にしたいと思います。

## 11. 多元的語りのおもしろさ② 一貫性の達成と矛盾

ライフストーリーを語るというのは、わたしたちが物語に一貫性を与えていくということです。ある人が語ってくれた、「こういうふう生きてきました。こうだったんだよ。ああだったんだよ」という語りをみます。そこに「前の話と今の話はちょっと食い違いますよ」という時は、「先ほどはこうおっしゃいましたけど、どうなんですか」と聞いたりします。そうした調整しながら、話の矛盾がないように、その人の人生を構成していくわけですね。ところがなかなか自分の人生を構成できないということもあるわけです。例えば昔はこうだったけど今語るとなると、という話になった場合には、なかなかそれを物語化できないということが起こりうるわけですね。例えば、警察官の人が、昔、万引きしたことがあるんだとしても、インタビューに来た人に、「警察という職業はどうなんですか」という話のときに、それをしゃべるのは抵抗がありますよね。つまり、現在の自分と過去の自分の間に不整合がある、そういうことがありますね。それを語るやり方は何かというと、「ああ、あそこで人生変わったんだよ、わたしの転機はあそこだったんだよ、昔は若気の至りでこんなやんちゃしたけれども、今はこんな立派な仕事についてんだよ」と、一種の転機を語ることで納得できるわけです。わたしたちも語り手のライフでそうした矛盾に気づいたら、それを納得しようとして、どこかに転機があったんだろうと解釈するわけですね。語りとして、あの頃若気の至りでというかたちで自分は変わったことを表現することがありますよね。



あとはその社会の中で非常にドミナント、支配的な語りがありますと、それを自分の経験とちょっと齟齬がある場合になかなか話しづらいということがあります。なかなか物語として語れないということが起こるんですね。例えば、ハンセン病という病気、昔、裁判にもなりまして患者さんの訴えが通りましたけれども、ハンセン病の患者さんというのは収容所に収容されるという形になっていました。ところが裁判のときには、患者さんがいかに被害を受けたかの語りが中心になりますので、一人ひとりの個人的な経験みたいなものは、元患者さんは語れなかったのです。自分は必ずしも強制的に連れて行かれたのじゃなくて、自分の自由意思で、逆に地域にいたら差別を受けちゃうのでむしろ自分からすすんで（収容施設に）行ったんだ、という語りもあるんですね。これを強制と見なすかどうかという問題がありますけど、でも一般的に言われる、「強制的に連れて行かれた」という話とは、ずれるわけです。こういう話は裁判の時の被害を考えたときにとてもしゃべれない。少し時間がたった後で、実はわたしはこうなんだ、あの時はしゃべれなかったけど、というようなことがあります。

それから聞きたいことと言いたいことがずれちゃう、つまり聞き手の方はこういう話をお願いしたいと思っている。でも、語り手は自分に聞くというからにはこういうことを聞きたいんだろうと一生懸命しゃべろうとする。例えば、地域の中で公的な活動で頑張って活躍した女性がいるんですが、その方に話を聞きに行ったときに、その県でも有名な仕事をしてきた方なので、一生懸命それを語ってくれました。ところがわたしたちはだいたいそれは知ってるわけです。この人が個人的に地域でどんな生活してきたのか、一方ではそういう公的活動をしながら、個人的にどんな生活をしてきたのかを聞こうとしていたわけですね。そうすると私たちが聞いかけると、彼女の話が途中で中断されるので、向こうもだんだん不機嫌になりましてね。結果的に2時間もインタビューしたんだけれども、もうこんなインタビュー嫌だって言って帰っていったんです。その後、何年かあとで会ったときに「当時覚えてますか」と言ったら、「覚えてるよ」という。家にまで呼んでお茶も出してくれたんですが、「ところでもう一度お話伺えますか」「絶対嫌だ」と（笑）、こういうこともあります。

## 12. 多元的語りのおもしろさ③ ヴァージョンのある話

それから、多角的な語りがおもしろいのはヴァージョンがある話です。語り手は一貫した話を語ってくれるんですが、複数回のインタビューでは話が違う場合があります。これをヴァージョンがちがう語りと言います。例えば1回目のインタビューをして、それからしばらく時間がたって2回目のインタビューに行ったときと、全然違う語りが出てきたりします。それぞれでは一貫しているんですけど、2つを比べたら違ってしまうということがあるんですね。例えば、わたしのデータではありませんが、ホスピスに通っている癌になった高齢女性に話を聞きに行ったときの事です。ホスピスは緩和ケアですね、死を迎える人たちが穏やかに死を迎える人たちの入所施設です。最初のインタビューでは、この施設に入った理由を、彼女は穏やかに死を迎えたいからと話したのです。ところが、2回目のインタビューでは、家族の話などを聞いていくと結局、夫との関係がうまくなくて癌治療を家庭では夫の協力がなければ受けられない。それが望めないで仕方なしにホスピスに入るようになったという話になった。ホスピスに入所した理由には2つのヴァージョンの話があることになります。これはどちらが本当かという話ではありません。では、これをどのように考えたらよいかは、すぐ後でお話しします。

それから、先ほどのハンセン病の場合は裁判中には強制隔離の話が語られるけれども、それが終わると自主的に自分で入所したんだという話も出てきます。あるいは、あるゲイ男性が、自分のセクシュアリティに気づいたことを、自分のライフストーリーを踏まえて語っています。これはライフヒストリーの分野で有名な研究者、ケン・プラマーのライフストーリーですけど、彼は子どもの頃に自分の性的な指向がちょっとおかしいと悩み始めるんですね。ある時、その悩みに耐えられなくなってお医者さんのところに相談に行くわけです。「いやいや、あなたは決しておかしいことはないんだよ。性的指向がそういうふうに向性に向かうこともあるんだよ」と言ってくれたので、ちょっと安心した。その後、ゲイの解放運動とかゲイパレードと出会うことによって、「ああそういう仲間たちがいるんだ」と気が付いていくんですね。言ってみれば、現在ではセクシュアル・マイノリティ、LGBTの話はかなり一般化してみんなに共有

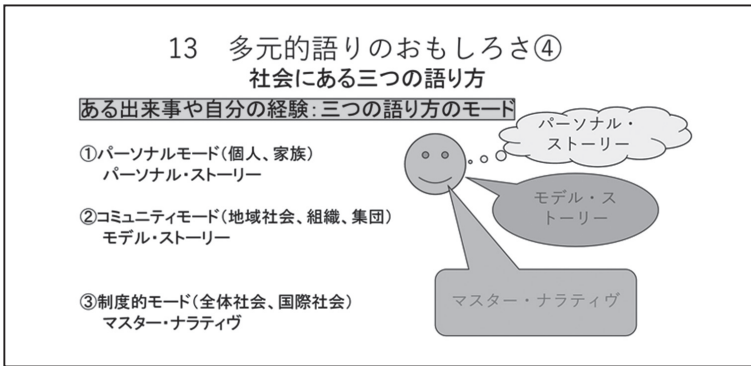
されるようになってきました。日本ではなかなか政治的には認められない部分が多いですけれども。そういうことが、ある程度普通になってきたという状況もあります。これは一人の人生の中でナラティブというものが変わってくる時代を表しているんですね。ゲイ解放運動は1970年代から始まりましたから。そういうふうに変わってきた人生、ライフヒストリーをずっと見ているだけでも、語りのヴァージョンの変化に気がついてきます。私たちが個人的に語るライフストーリーも社会で流通している話と深く関連していることもわかります。

ここであらためて、この緩和ケアの二つのヴァージョンのストーリーというのは一体どういうことなのかを考えてみましょう。1回目の語りは、一般的にホスピスはこういうものだという形で、緩和ケアの意味があることが強調されているストーリーですね。ところが、2回目のインタビューの夫から治療の協力が得られないというのは、この人の家族という個人的な経験です。この2つはどちらが正しい話なのか、この人の本音はどちらなんだろうとなると、プライベートな話をしてくれた2つ目の話が本音のように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。彼女は自分がホスピスに入ったことの2つの違う次元の語りをしているわけですね。1つ目は、ホスピスが緩和ケアであるというのはコミュニティ社会のなかで流通している語り方なんです。その語り方を借りて自分のホスピス入所の経験を語っているのです。誰もが理解しやすい語り方ですね。2つ目は自分の家族関係という個人的な経験から語っているわけです。したがって、本音かどうかではなく語りの次元がちがうとらえていい、と思います。

事例の2も同じようなことが言えるわけですが、1つ目の方は、言ってみれば、全体的な社会の中に流通している、制度的な語りなんです。強制隔離だといわれ、これが裁判で闘って勝つためのストーリーですから。だけど一人ひとりには、「自分はこうだったんだよね」という経験的な語りがあるが、この時期には封印している人もいるわけです。だから2つ目の語りは、そうした時期が終わった段階で、個人的な経験から語っているわけ。そういうふうと考えますと、ゲイ男性の場合でも、1つ目の語りは時代の問題なんです。この時期にはコミュニティや社会にゲイという人たちの、セクシュアル・マイノリティの語りというのは流通していなかったもので、個人的に悩まざるを得なかったの

です。でも時代とともに、いろいろな人たちとの出会いがあって、初めてセクシュアル・マイノリティの語りがあるコミュニティや特定のグループには共有されていることがわかってくるわけです。現在というのは、社会全体である程度セクシュアル・マイノリティの語りは共有できている状況ですよ。そうしたら、自分はゲイですということ自体は何も変じゃないわけです。差別的な状況は個別にはありますが。そういうようにナラティブの次元が違う。だからバージョンが違うからどっちが本音か、という話ではないんだ、ということを理解してください。

### 13. 多元的語りのおもしろさ④社会にある三つの語り方



最低限、社会には3つの次元の語り方があるのだということを押さえておく必要があるのではないのでしょうか。1つはパーソナルなモードで語る、パーソナル・ストーリーとわたしは呼んでいます。それからコミュニティ、地域とか組織とか集団におけるストーリーです。この次元のさまざまなストーリーの中で卓越した語りをモデル・ストーリーと呼んでいます。だから一人ひとりの語りは必ずしもこのモデル・ストーリーに沿っているわけではありませんが、みんなが了解可能なストーリーというものです。例えば、差別のような問題が出てきたときには、人権という観点が重要性といったストーリーがモデル・ストーリーになっていけば、このストーリーがかなり有力な反差別の力になります。

それから、これは制度的なルールのようなものも含まれますが、全体社会で流通しているものをマスター・ナラティブとわたしは呼んでいるわけですね。だから一人の人は、いろんな次元の語り方ができるんだというふうにとらえることもできますし、一人ひとりの個人的な経験の語りも、じつは社会とどのようなつながりをもっているのか、社会との関連を考える手がかりになるということが、こうした語りの次元から見えてきます。例えば、この人たちはこのモデル・ストーリーというものに対し、それを当然と考える人もいるでしょうし、多少、社会に反発し自分はやはりパーソナル・ストーリーが大事だと思っている人もいます。

自分の個人的経験だけでも、とても辛いとか困難を抱えているという経験を社会に訴えていくことで、それが次第に社会の問題として受け入れられていくことがあります。声をあげるというのは、自己経験の社会化にもつながっているのです。例えば、今から2、30年前になりますけども、「セクハラ」という言葉が登場してくるのは1980年代からです。それはやはり一人ひとり女性のパーソナルな経験みたいなものが声になってくるところから始まっています。DV、ドメスティックバイオレンスという言葉が出てくるのも、昔は「そんなの夫婦の話じゃないか、私的な話じゃないか」と「夫婦げんかは犬も食わない」と言われていた時代から、次第に社会の問題になってくるのは、やはり声をあげて訴える女性が登場してきたことによります。そのパーソナル・ストーリーがコミュニティで共有されることではじめて、そういうストーリーとして定着してモデル・ストーリーになってくるわけですね。だから、そういう観点で社会の問題と個人の関係を見ていくということがありえるんじゃないかと思います。だからわたしは今のところ、この3つの語り方のモードを、しっかり人々の語りから見極めていく必要があるんじゃないかと提案しているわけですね。

## 14. おわりに

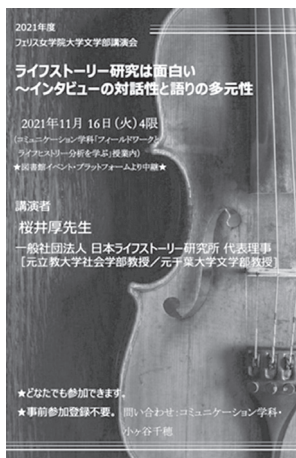
最後に、初歩的な話ですけれど、まず自分の研究のテーマの関心でライフストーリー研究をするにしても、テーマに直接関連することからインタビューす

るのではなく、やはり語り手のライフや経験、またライフヒストリーなどの全体的なインタビューからスタートするのが基本だということです。そうした全体のライフから自分のテーマに接近するのがライフストーリー研究の基本ですね。それから複数回のインタビューをぜひやってほしい。そうすると今日お話ししたような矛盾した語りやバージョンの違う語りが出てきたりもします。ともあれ、語りを解釈する手がかりがつかめる機会が増えます。それからライフストーリー研究というのは、聞き取ってきたデータの分析、解釈が大事なじゃなくて、データそのものがまず大事なので、インタビューそのものをしっかりやってほしいということですね。それが不十分だとどんな巧みな分析をしても意味がありません。しっかり、対話的インタビューを心がけてください。また、個人情報保護の問題もありますので、この辺は丁寧な配慮が必要です。トランスクリプトを語り手に確認してもらうなどして、個人的な経験の語りを研究として利用する許可をもらうようにしてください。そのためにも複数回の会うことを心がけてください。また、語りの中でとても研究上重要なところは、積極的に本人に了解をもらう、プライバシーとして難色を示されたときは理由を説明して利用する交渉をしてもよいと思います。

これは特に若い研究者の人たちに伝えておきたいのですが、以前フィールドワークに出ていたときに、現地の人から「あの時話を聞きに来ていた人、結局どうなったんでしょうね」、つまり研究成果が届けられていないんですね。研究が終わったとかの連絡が何もないので、ライフストーリー研究は個人のライフや人生にふれる研究ですから「せっかくあそこまでしたのに」っていう思いが語り手にはあるわけです。だからこれは何らかのかたちで結果をちゃんと調査協力者に返すようにする必要があります。そういう意味では調査を越えて、他者と出会っていくということが大事なんじゃないかなと思います。

※本稿は、2021年11月16日に開催された2021年度文学部講演会の講演録である。講演会是对面とオンラインのハイブリッドで行われ、講演後には参加学生との熱のこもったやりとりが続いた。ご講演いただいた桜井厚先生に、心からお礼申し上げたい。なお、記録作成にあたっては、大野恵理氏（本学非常勤講師）の協力を得た。記して感謝したい。

（2021年度文学部講演会実行委員会 饒平名尚子・田中里奈・小ヶ谷千穂）



当日のポスター



熱のこもった桜井先生の語り



熱心な当日の対面参加者たち@図書館イベント・プラットフォーム



